

《旧市長公舎建設前の新潟砂丘》

【近世】都市の外縁・町民憩いの場

- ・「新潟砂丘」は角田山東麓から現村上市岩船に至る約70kmに及ぶ日本屈指の砂丘である。
- ・記録上、近世初頭には現新潟市中央区古町付近の「新潟町」北側に、「古新潟町」（同寄居町付近と想定）の存在が確認されている。（発掘調査等での出土履歴なし）
- ・当時の内陸部では稻作が主であった一方で、海岸砂丘上での主な生業は製塩・沿岸漁業（近世中期以降はイワシ漁）・畑作などであった。
- ・江戸時代中期、新潟町は日本海側屈指の湊町に発展した。
- ・湊町としての発展に伴い、水先案内人の拠点として、湊に近く見晴らしの良い場所が日和山となつた。日和山は高い砂山で眺望が良く、多くの人々が訪れる憩いの場であった。
- ・江戸時代、海岸砂丘には樹木が少なく、強い風が吹くと砂嵐になった。飛砂は農作物に被害をもたらすだけでなく、毎年のように村を襲い、移転を余儀なくされた。
- ・宝暦年間（1751～64年）以降、海からの飛砂防止のため、マツを主とした植林が継続して実施され、砂丘を松林が覆う今に至る景観となる。
- ・幕府の新潟上知以降、砂防林は「御林」に指定され、幕府の管理となった。

【近代】砂丘地は近代都市機能を支える場に転換

- ・明治以降、「御林」は保安林となり、引き続き国家管理となった。
- ・新潟県が設置され、新潟町は県庁所在地となり、経済だけでなく行政の中心地へと発展していく。
- ・砂丘地には招魂社（現護国神社）、各種学校、南山配水場（旧日本海タワー）等の公共的な施設が立つ地となった。
- ・1908（明治41）年の新潟大火後には、西大畠町に斎藤家別邸や市長公舎、日本銀行新潟支店長役宅（現砂丘館）等が立つ高級住宅地となり、料亭等（「行形亭」「堀田屋（堀田楼）～島清（島清館）」）も付随する形で進出していった。

<年表>

年代	主な出来事
1751 宝暦年間	飛砂防止のため新潟町で砂防事業が始まる。
1843 天保 14	幕府が長岡藩から新潟町を上知し幕領とする。川村修就が初代新潟奉行に任命される。
1870 明治 3	新潟県が設置され新潟町が県庁所在地となる。
1889 明治 22	市制が施行され新潟市が誕生する。
1908 明治 41	新潟大火
1911 明治 44	2代目市役所庁舎が竣工する。
1914 大正 3	沼垂町が新潟市に合併する。第一次世界大戦が始まる。
1917 大正 6	新潟築港工事が始まる。（1926年完成）
1919 大正 8	新潟市が「新潟市市区計画方針大綱」を制定する。新潟高等学校が開校する。
1922 大正 11	柴崎雪次郎が新潟市長に就任する。新潟医学専門学校が新潟医科大学に昇格する。 大河津分水が通水する。 <u>市長公舎竣工</u>

1 新潟市の都市としての発展段階

- 1922年当時は市制施行から33年目で人口約7万人前後の地方中核都市。
- 江戸時代からの港町としての伝統と明治維新以降の近代化による発展が交錯していた時期。
- 明治末から大正にかけて、新潟港では大規模な港湾工事が行われ、外航船の接岸が可能になり、北前船の時代から日本海側有数の物流・貿易拠点としての地位を維持していた。

2 経済・産業の動き

- 新潟県全体は「日本一の米どころ」として知られ、新潟市はその流通・商取引の中心地。
- 新潟港からの米の積み出しが盛んで、商人層が経済の主役であったが、製粉・製紙・紡績等の軽工業が郊外で立ち上がり始める。近代的な工場と伝統的な町人商売が混在していた。

3 行政と都市インフラの整備

- 1911年に2代目市役所庁舎が竣工。行政機能の拠点が整備され、市政の近代化や市長の権限強化が進展。
- 人口増加により、道路の拡張や住宅地の造成が求められ、1919年に「新潟市市区計画方針大綱」が制定された。
- 1922年の大河津分水通水に伴い、流量の減少する信濃川を埋め立てる計画が検討された。

4 社会と文化の動向

- 小規模ながら新聞・演劇・小説などの文化活動が活発化。この時代に生まれ育った坂口安吾（1906年～）などが後の文化人として成長する。
- 1900年代初頭から小学校・中学校・女学校の整備が進み、1919年には旧制・新潟高等学校が開校し、教育都市としての機能が強化された。